大遠忌の歩みとその時代

第二回　五〇〇回・五五〇回忌

大遠忌の記念事業として、現在も御影堂など境内の建造物修復が行われますが、親鸞聖人五〇〇回・五五〇回大遠忌にも大規模な修復事業が行われました。

親鸞聖人五〇〇回大遠忌は、本願寺第十七代法如宗主の時代の宝暦十一年（一七六一）三月十八日から二十八日までの間厳修されましたが、これに先だち、阿弥陀堂の再建が始められました。

阿弥陀堂は、元和三年（一六一七）の火災で焼失した翌年に再建されましたが、寛永十三年（一六三六）に御影堂が再建されるまで、仮御影堂として機能していました（接待所を仮阿弥陀堂として用いていました）。

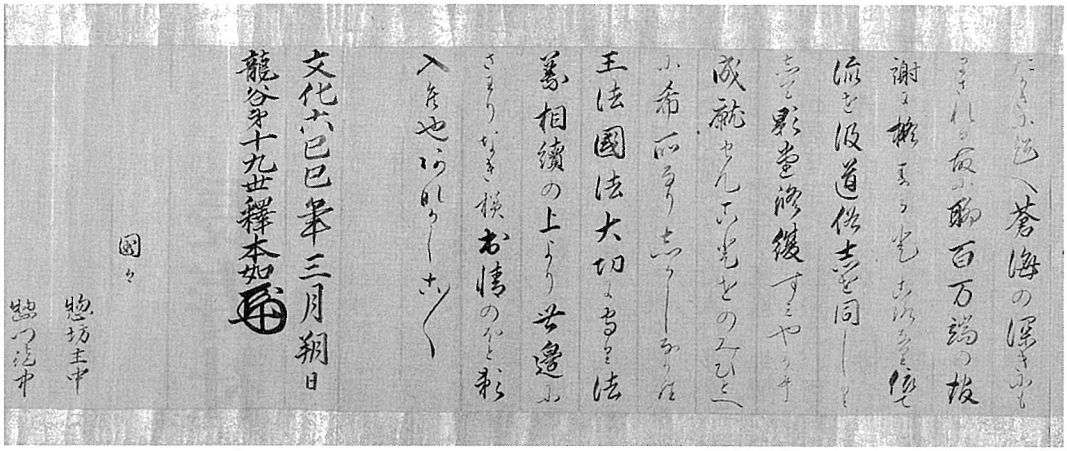
しかし、短期間で建立した急ごしらえの建物であり、小規模でもあったことなどから、建立から一三〇年余りを経て、再建されることになりました。この時再建された阿弥陀堂が、現在の阿弥陀堂です。

また、この時あわせて御影堂の修復も行われました。その詳細は不明ですが、宝暦十年の銘のある瓦なども見つかっていますので、瓦の葺き替えなどが行われたようです。

親鸞聖人五五〇回大遠忌は、第十九代本如宗主の時代の文化八年（一八一一）にそれぞれ三月十八日から二十八日までの間厳修されました。この時の記念事業として、御影堂の修復が行われました。

本如宗主は、寛政十一年（一七九九）六月、文如宗主が亡くなるとその翌年八月に、諸国門末に宛てて御影堂修復についての布達を出し、さらに京都・大坂の講中に修復協力を依頼しました。本如宗

ヘラ書による「宝暦十庚辰歳六月御造工」などの銘や櫛引（「田」文字）のある平瓦



文化6年（1809）3月に国々惣坊主中・惣門徒中に宛てて出された本如宗主の御消息

主は文如宗主の遺志を受け継いで、継職後早々に御影堂修復という大事業に取り掛かることになったのでした。

享和元年（一八〇一）三月に、御影堂修復斧初の儀式が執り行われますが、このころ宗派内では、三業惑乱という宗学上の大問題が発生しており、この解決に幕府が介入することになって、その裁判費用・江戸への下向旅費など多額の経費が必要でした。そのため修復費用の確保が思うようにはかどらず、修復もなかなか進みませんでした。本如宗主は、再三、諸国門末に向け、御影堂修復懇志の上納を依頼する消息を出され、協力を求められました。

文化三年（一八〇六）七月に三業惑乱問題が決着し、大工棟梁の水口若狭守宗之を中心として、全国各地から集まった職人・材料・懇志などのお陰をもって、ようやく実質的修理を始めることができたのでした。

余間の蓮池の絵などは新調することになり、吉村孝敬によって描かれました。

その他、書院や御影堂内障壁画の修復・厨子彩色には、円山応瑞・吉村孝文といった円山派を中心とした絵師が携わり、本願寺絵所の絵師だけでなく、こうした洛中在住の絵師も御影堂修復に加わっています。

こうして全国の僧侶・門信徒から寄せられた懇志をはじめとして、多くの人びとの親鸞聖人に対する篤い想い・尽力によって、大遠忌法要前年の文化七年十一月に完成、翌年三月には、御影堂で五五〇回忌の法要を無事にお勤めすることができたのでした。そしてこの親鸞聖人に対する人びとの想いは、現在へも脈々と受け継がれ、親鸞聖人御座所である御影堂は支えられているのです。

（本願寺史料研究所研究員　大原実代子）